

母と2人で生きていく

いま No.453
子どもたちは
親が離婚した…④

福島県が震度6強の揺れと、大きな津波に襲われた2011年3月11日。海から約1・8キロの自宅にいた高校3年のユウキ君(18)は、同居する祖父母の手

をひき、母のミサさん(46)とともに親類の家へ避難した。自宅は半壊。親類や同じ学校の生徒が亡くなった。

多くの人が心配して連絡をくれた。でも、離れて暮らす父(54)からは一切の連絡がなかった。「別に、何とも思わなかった」。手元に視線を落とし、「父に会いたいと思ったことがない。何もしてくれない人。今後もかかわりたくない」。

ミサさんが離婚したのは、ユウキ君が1歳のとき。「子どもを渡せ。養育費は払わない」という夫の怒声を聞きながら、ユウキ君を抱っこして実家に戻ってきた。収入はパートで月7万円ほど。両親と同居しているため、生活保護は受け取ることができない。貯金を崩しながらギリギリの生活を続けてきた。

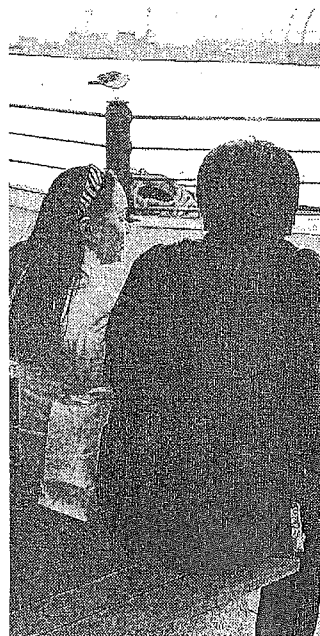
ユウキ君は小学6年のとき、仲良しの友人たちと私立中学の受験勉強を始めたことがある。だが、すぐにお金がないことに

気づいた。「父に援助を頼んではどうか」と言う親類もいたが「何を今さらって。見返りを求められ、将来の世話をしろと言われたら嫌だ」と断った。ミサさんに不満を漏らすこともなく、地元の中学校から県立高校に

進学した。ミサさんは「私に気を使ってるのかもしれないね。私にとって夫は酔って暴れる怖い人ではないので」。優しいユウキ君に我慢を強いてきたと振り返る。数年前に体調を崩して

療養中だが、進学希望のユウキ君のために、レセプト入力などの在宅ワークを続けている。だが、県立高校の授業料は無償だったが、今後は授業料がかかる。県内のひとり親家庭は、子どもが18歳になるまで親子ともに医療費が無料だが、これも期限が切れる。より厳しい経済状況に陥るのが見えている。ユウキ君は、どこか吹っ切れたような顔で言った。「母が好き。ここまで育ててくれて、感謝しかない。これからも2人で生きていくことに変わりでないです」

(古田真梨子)



体調の悪い母親を気遣うユウキ君(右)=15日、福島県